

アメリカシイブルック原発占拠行動

千八百人の非暴力直接行動

去る4月30日から5月1日にかけて、全米各地から集まった一八〇〇人の非暴力直接行動者グループが、ニューハンプシャー州シイブルックの原発予定地に進入、原発建設に反対してすわりこみ（泊りこみ）を決行した。これほど多くの人が原発敷地を占拠したのは米国では初めてのことで、当局と同警察の介入によって一四〇〇人以上が逮捕されたが、被逮捕者のほとんどすべては無罪を主張し、保釈金の支払いを拒否した。そして次の占拠行動では一八〇〇〇人の大集団で必ずもう一度やってくると断言している。

（シイブルックには一五万kwの原発二基が建設される予定だが、米政府の承認が遅れているため、この数ヶ月間工事は中断されている。この計画に反対する住民がハマガリ同盟を結成し、四月三十日の行動目的は、地元のハマガリ同盟と連帯し、米政府の承認を事実上阻止することにあった。）（※ハマガリ同盟一九七五年六月に結成された、ニューイングランド州の15の反原発組織を包括する連合体）

今回の占拠行動は早い時期から八念に準備された。行動の基準になるのは、非暴力直接行動による市民不

服従の理念である。参加者は非暴力行動トレーニングセミナーを受けることになっていた。この訓練を受けた人たちが十人から二十人を一組として各班を形成する。各班は一名の代表を選び、逆に代表は班員の向から委員を選ぶ。これは緊急の際、すみやかに行動方針を決めるためである。ハマガリ同盟が用意した「占拠者ハンドブック」は、参加者に対して寝袋、雨具、飲水、乾燥食（沢山）をもってこることを指示している。犬、猫、酒、グラス、武器と見なされるものはすべて家に置いてくることとされていた。

各班は占拠に加わらない一名の連絡員を決め、その人は班員の乗物の番をしたり、外部との通信連絡、食糧の補給に当ることになっていた。また逮捕や裁判に備えて、法律対策部もつくられた。

この非暴力直接行動による固いは、昨年の七月、米原子力規制委員会が電力会社に原発設置認可をあたえたときから決定されていた。昨年八月一日、現地で八〇〇人の集会が開かれ、そのうち十八人がミニ占拠を行なって逮捕された。

八月二二日第2回現地集會には1200人が結集、うち180人が敷地ですわりこみ、警官によって排除あるいは逮捕された。10月には敷地の近くで代替エネルギー展覧会を開き、2日間で5000人の人たちが参観した。

すわりこむまで



今年の4月30日、シールックに集まってきた1800人の参加者の大部分は、非暴力行動の技術を習得し、大衆行動の中で逮捕されることをあらかじめ覚悟している人たちだった。これほど多くの人たちが、警察の妨害線を通りすぎ、4方向から敷地の中に進入できたことは、計画があらかじめ十分に練られていたこと、人びとが組織行動にも十分習熟していたことをも語るものだった。

地元のパタリ同盟の人たちでさえ、占拠者たちは敷地の入口で警官隊に追い返されるのではないかと予想していた。が、それに反してすわりこみ占拠を2日間にせよ実現したのは大成功だった。

30日の朝は、まるで占拠行動を祝福するかのように太陽が輝き、こころよいそよ風が吹いていた。敷地をめざして行進を始めたオーケループには、テキサス・アーカンサス、サウスカロライナ、バージニア、コロ

ンビア地区など南から来た人たちがいた。彼らの多くは30代であり、さまざまな闘争の経験者、活動家の生き残りだった。

コロンビアやサウスカロライナから来た人は草の根運動組織ケループに属し、自分たちの出身地で反原発運動を行なっている。それに続くマサチューセッツのウースター・ケループには、ハイティーンから40代の人びとまでが含まれており、学生、地域活動の組織者、反公害運動者といった顔ぶれである。

行進に先立って、あるいは行進の間中、外から不審者がまきれこまないよう、厳重に注意が払われた。現にこの朝も、キャンパ地近くの森の中で、五人の若者がフドウ酒を飲んで騒いでいたことが報告され、注意するよう指示されていた。

占拠行動の参加者には「ストツァ・シールック」と読め抜いた緑と白の腕章が配られた。各班にはそれぞれ出身地名や「赤い風船」「ニユクリア・オメガ」「ウースター・クウオーホグ」(「貝の一種」といった名前がつけられていた)。

行進は両側に水仙が咲き乱れる春の道をのどかに進んでいったが、敷地に近づくとき警察の車輛やテレビの取材車が眼に入り、頭上には州当局のヘリコプターが飛びまわり、緊張感がました。

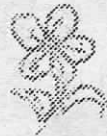
敷地に入る直前に、指揮者はもう一度全員に確

認を求めた。「逮捕される用意ができていない人は、ここに残ってほしい。敷地の外でもないっぱい大切な仕事はある。」そして、カラス類と酒類をもちこまないようもう一度指示された。医薬品についていえば、医者、1人の消防隊員、看護婦からなる救急医療班が必要に応じて供給することになっていた。

一方、陸上からの行進に呼応して、シーハルックの漁民たちは海岸から水路を船で通り、敷地へ入る道を開いた。

原発敷地に生れた

解放区



占拠者が全員一せいに動き出し、敷地に入った。たちちに代表者会議が開かれた。まず全員の自己紹介が始まった。単なる形式的なものではなく、人間的な感情の交流を育てるための大切な手段だった。彼らは、警官たちとさえ、人間的な気もちを交すことを重要だと考えていた。会議ではこれからの行動計画や外部から補給すべき物資のリストが作られた。

占拠者にとって何はともあれ必要なのは便所だった。元気な人たちがすでに便所用の穴を堀りにかかろうとしていた。占拠部隊の中の一人の土壤専門家が、排出物が地下水脈を通して沼沢にしみ出さないような場所を決めた。

各班のキャンプの場所が決った。補給すべき品として飲料水、日焼け止めローション、トイレレット・ペーパー、ゴミ箱、バッテリーなどが追加されたが、ラジオとランプは不必要として除かれた。

日曜日の朝が明けると、原発敷地は「核のない都市」に生れ変っていた。道路標識や給水所が設置され、食事の支度が始まった。代表者会議はたえず方針や規律を検討し、小さな政府の役割をはたした。科学者たちは早速太陽集熱器を取りつけて、使いだした。広場のあちこちで「大学」が開講され、織物の講習会や自由討論が行われた。

警備班も組織された。36人のメンバーが交替でキャンプ場を巡回し、人びとを混乱させるようなデマを静めたり、身元のはっきりしない参加者を調査した。「核のない都市」は活気に満ちており、刑務所以外は何でもそろっている人間の町になった。

昼ごろ、トムソン州知事が占拠者を説得するためにヘリコプターをやってくるという情報が入った。代表者会議は至急に知事と交渉する女性3人、男性3人の代表を選んだ。その中にはレニー・カッシン(男)とエリカ・ベス・ホードマン(婦)が入っていた。彼女は60歳、クウェーカー教徒である。

午後2時前、知事が多くの機動隊員に守られてヘリコプターから出てきた。「君たちは不法侵入して

いる。二うした法律違反を認めることはできない。」「ホドマンはあだやかだが、しっかりした口調で知事に答えた。「その法律を改めるには、先ずその法を破らなければならぬ」と蓋が感じています。交渉はもの別れに終わった。知事の一行はそそくさと立ち去った。

つぎに州警察の指揮者が現われた。「皆さんが帰りにするためバスを用意してあります。」占拠者たちは、せいに吹き出した。黄色いスクールバスが何台も敷地に入ってきた。代表たちは口々に言った。

「私たちは聖方会社の社長と話し合いたい。もし彼が原発の計画をあきらめるなら、すぐ家に帰ってもいい。」「私たちの目的は原発建設をやめさせることです。私たちは逮捕も覚悟しているのです。」「指揮者は45分の猶予時間のうちにここを立ち去るか、それともここに、あくまでとどまるのが回答を要求した。

ちやうど多時に、エリカベス・ホドマンは占拠者全員を代表し、「一人残らずこの土地を一步も退かないうつもりである」と州警察の指揮者に通告した。

300人の警官隊が逮捕の準備を始めた。占拠者の間にニンジンの袋がまわされた。興奮と緊張をときほぐすために、人びとは生ニンジンをかじった。

「田結した人民は決して負けない!」——すわりこんだ人たちの間からわき起こった歌声は、警察指揮者の

声で妨げられた。「諸君にこの敷地からの退去を命令する。もし退去しない場合は、不法侵入罪で逮捕する。」「占拠者のだれひとりとして、その場から立ち去ろうとしなかった。

全員タイホ!

すわりこんでいる人たちの間に、逮捕へつまり公民権の侵害に備えて、マサチューセッツの弁護士事務所やハマグリ同盟の電話番号が再確認された。みんなは電話番号にふしをつけ、歌にして暗記したが、覚えられない人たちは、前晩に番号を書きつけた。

3時45分、ニューヨークから来たゲニエル・ローが最初に逮捕された。写真をとり、書類に記入し、指紋をとったあと、バスの中に監禁された。この手続きは五分かった。この調子だと、全員の手続きを終えるのに100時間以上もかかってしまう。

警官はすわりこんでいる人たちを、一人ずつバスの方へ連れてきた。歩くのを拒否する者は、警官2人がかりで引きずった。

逮捕ははかどらなかつた。5時を過ぎても、まだ多くの者が残っていた。彼らはタコをあげたり、トランプに興じたり、本を読んだり、ナツアサック

から食物をとり出してハラゴしらえをする余裕があった。6時ごろ、何人かが顔に「原発反対」と書いたり「原発は危いノ原発は高いノどちらでもない」と書いた小さなラベルをはりはじめた。「こうやっておけば、なぜあまわりにつかまっただか、みんなにわかってもらえるわ」と1人の婦人が言った。

すわりこみのうしろで見守るクルーの一部の人たちが、突然、くず入れ用のドラム缶を棒で叩き出した。そのリズムに合わせて何人かが立ち上って踊り出した。静かにすわり込んでいる人たちは、余り派手にやりすぎると、つかれている警官たちを刺激するのではないだろうか、と心配した。

ホードマン女史のクルーは、この騒がしいうごきを静めた方がいいかどうか議論した。その結論は「なかなかけっこうなりズムじやない。すわりこんでいる連中はみんな緊張しすぎているから、少しは緊張をほぐした方がいい。踊っている人たちも、すぐ静かになる」だった。そして、この予想通りに騒ぎはおさまった。

金髪のケート、ドネリは、破の中にすわりこんで動こうとしなかった。警官の1人がどうしてバスまで歩こうとしないのかとたずねた。「それは良心の問題です」「でも、引きずられるのは、気分のいいもんじやないよ」と警官は言う。ケート「あんたどこから来

たの」警官「アリマス」。ケート「原発をどう思っているの」。警官「いちいち気にしてませんよ」。そんな話をしながら、ケートは権力の腕力によって地面をバスまで引きずられていった。

暗やみが迫ってきた。警官隊は現場での写真撮影書類記入、指紋採取をあきらめて、つきつぎに人びとをバスの中に押しこんだ。しかしそれでも、全員が逮捕されたのは、翌朝午前5時45分だった。

逮捕された人の総数は1414人にのぼった。そして彼らは、それから15時間もの間、バスの中に閉じこめられることになる。

保釈拒否の團い

日曜日の朝12時20分、逮捕された人たちは、プリマスの州兵部隊本部まで運ばれた。同本部の大広間は、罪状認否の審問の順番を待つ人びとで溢れた。1回に10人ずつまとまって、4人の判事の前に呼び出された。外では多くの人たちがバスの中で待っていたし、警官はその頃、まだシリアルックから逮捕した人たちに輸送しつけていたのだった。

最初に呼び入れられたホーストン・クループには、学生、修道女、牧師などが含まれていた。全員同じ罪名なので、判事は時間をかせぐため、名簿のトッ

プに名前が出てゐる人だけを、クルーポを代表して起立させた。「ティモシー・ヤビー君は電力会社の所有地に不法侵入したことで罪を認めるか」判事が問うと「無罪です」。こうして一人ひとり同じ回答がくりかえされた。

判事は各人に200ドルの保釈金を言いわたしたし、次のクルーポを呼び入れた。しかし、どのクルーポの人たちも無罪を主張した。そして、一人のこうず保釈金の支払いを拒否した。

トムソン知事はじきじき、兵本部にヘリコプターでのりこんできて、原案予定地を占拠した者全員に、保釈金の支払いを命じた。が、知事の予想に反して、全員が拒絶した。1414人の被逮捕者は、州内5ヶ所の州兵部隊に分散留置されることになった。

彼らは、兵營の中であらためて行動班を再編した。そして、留置所内のたたかいを続けるための方策をうった。まず、長い拘留に対するため、体の弱い人や職をもっている人たち、家庭に子供や病人をかかえている人たちは、保釈金を払って先に出ることにした。

そして、約半分の人たちがちヶ所の兵營に残った。その一つ、マンチエスター州兵部隊の様子を取材した「サンデー・ビューレティン」紙の記者はつぎのよつに報告している。

「ここは本来なら拘留所であるはずだが、実際に見

てみると、まるでホーイスカウト大会かフオーク・ミュージック・フェスティバルといった感じだ。

ここには、1414人の被逮捕者のうち691人が拘留されている。彼らはタイア用紙をつなぎ合わせて看板をつくり、自分たちのいる場所を「ニュー・フリーブルック」と言っている。そしてここはニュー・ハンフシャ州で47番目に大きな町だ、と言っている。逮捕された者のうち3人がタイプライターを持っていたので、拘留されたその日からニュースを発行しはじめた。彼らは、報道、法律、教育などの委員会を組織し、法律委員会は法廷闘争の戦略戦術を練り、教育委員は学習会の組織に当たっている。

拘留所の中には臨時の売店までがつくられ、パンフレットや新聞を売っている。板紙で組立てられた売店の壁には、タイアで打った通信や差入れられた新聞の切り抜きが張ってある。百名の州兵が交替で拘留者を見張っている。州兵は1メートルほどの棒を手にしてゐるが、逃亡者がいても止めないようにとの命令を上層から受けている。しかし、逃亡しようとする人は一人も出ていない。

インブルックの意味

トムソン知事は今回の占拠に対して強硬な態度でのぞんだものの、逮捕された人たちが無罪を主張し、保釈金の支払を拒否したため、拘留費用だけでも1日5万ドルにのぼり、財政上からも甚堪に立たされることになった。

そして、2週間目の5月13日、残っていた人たちが全員を住所氏名の確認をするだけで、保釈金なしで釈放しなければならなくなった。600人全この人たちが全員自由になった。これはハマケリ同盟の要求が全面的に実現したことを意味している。

最後に、今回の占拠闘争に参加したわれわれの親しい友人からの報告を、2つの点に分けて紹介する。

① 今回のシールック原案予定地占拠行動の特徴
② 12歳以上の中学生や高校生の参加が目立った。また大学生の参加も多かった。政治的に無関心層が増えている学生たちが、これほど多く各地から集ったことは注目に値する。逆に70歳近い老人や、家庭の主婦子供連れも参加した。これは非暴力直接行動への参加者の幅が広がっていることを示している。

③ 地域的にはニューイングランド一帯だけでなく、遠くカルフォルニア、ノースカロライナ、インディアナ、オハイオなどからの参加があった。これは新しい型の住民運動が、それらの地域にも拡大する可能性があることを示していないだろうか。マワチューセツ

州はとくに反原発運動がさかんであり、そこから④は、700人以上が参加した。

⑤ 地元のシールックと周辺の住民の関心が高まった。そのことは、占拠闘争の後の住民投票で半数以上が原発反対に投票した。

⑥ 今回の行動では、非暴力直接行動の原則が守られた。また参加者の間でマリファナやアルコールが禁じられたことで、警察に逮捕の口実を与えなかった。

⑦ 裁判闘争が運動側のペースで進められ、5月13日に全員が釈放を勝ち取ったのは、画期的なことだった。逮捕者の救援のため、100人近い人たちがキャンプ、ランドでテント生活をしながら、連日兵營を訪ね、差入れを、メッセージを交換して励まし、外の様子を知らせた。弁護士たちもすべて手弁当でうごいた。

さらにきびしい闘いへ

6月17日、政府の環境保護局はシールック原発の建設を事実上承認した。

今後のシールック原発承認を機会に、カーターの原動力政策ははしくずし的に、原発建設に拍車をかけることになるだろう。彼もまた「資本の側」に

立つてものを考える政治家の一人にすぎない。

シーアルツクのハマタリ同盟は、今秋より大規模な占拠行動を計画している。次回は権力の側もより強硬な態度が出てくることだろう。きびしいたにかいにないそう。

カーターにせよ、誰にせよ、今日は一人の政治家の

善意に期待する時代ではない。

運動の側の力量や質で政治家を動かすことはあつても、政治家が住民のために何かをしてくれるという状況でないことははっきりしている。

(日報へ公署を逃すは6月17日5月5日掲載より抄出)
(自筆原稿原稿カール・P・市民とネグロ・研究を所・提供)

占拠の思想

反原発運動における非暴力直接行動の展開

最近までの[＊]反原発運動は、周囲住民への教育宣伝と立法的な措置などの合法的な方法で表現されてきた。

ところが反原発運動のなかにあらわれた直接行動の使用は、全く新しい局面を展開することとなった。

いまアメリカのほとんどの人々は、シーアルツクの原発敷地の占拠についてはよく知っている。がそのような大衆的直接的行動が、すでに、すくなくともワケ所すなわちスイスのカイゼルアウグスト、西独のヴィール、プロクドルフ、グロンドヘー、フランスのマールヴィール、ラペララン、イタリアのマンタルトなど一

で行われたことは知らないだろう。

これらの行動こそほとんどは八占拠でつたが、特に注目されるのは、その行動者規模がいつも千から三千人にも達していることである。

本稿で私は、ヨーロッパの反原発運動における八占拠行動の発展のあとを記述し、ついでアメリカにおける反原発運動の成り立ちにおけるそれと比較考察してみたい。

＊注 主なデモマーク・ノルウェー・英・西独・日本・フランス・イタリア・アイランド・スイス・オーストラリア・ニュージーランドを指す。